

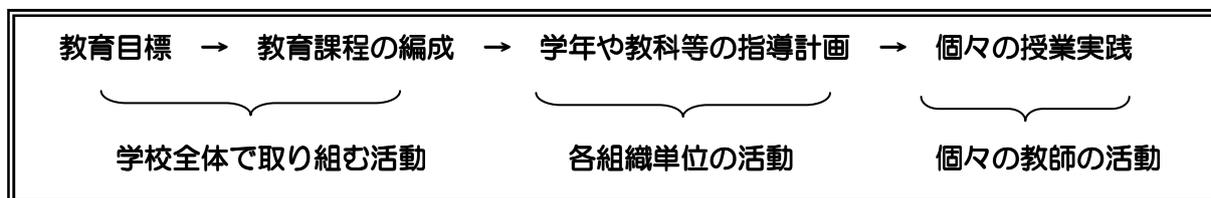
研究テーマ 「授業充実に向けた協働的な取り組みに関する研究」(第2年次)
— 学校組織マネジメントの視点から —

I 研究の趣旨

特別支援学校においては、近年の児童生徒の障がいの重度化・多様化に対応すべく、さまざまな障がいのある児童生徒に対する教育活動の展開が求められるようになった。また、そのために、児童生徒一人一人の教育的ニーズに応えることのできる授業の充実がより強く求められている。

こうした現状を踏まえ、当センターでは昨年度の調査研究において、県内の特別支援学校の教師を対象に「学校組織マネジメント」の視点から、その教育実践の現状と課題に関する実態調査を行った。これは、「教育課題把握シート」による自校のチェックを各校の教師がそれぞれに記入し、授業者である一人の教師とその教育実践を支える組織としての学校との関係を明らかにするものである。そして、よい点や改善が必要な点を明確にすることによって、各校が直面している教育課題を自らが把握し、今後の教育実践を改善していくことをねらいとしている。

授業実践は、下図に示すように、学校全体で取り組む教育目標の設定や教育課程の編成、さらに学年や教科等の組織単位で取り組む指導計画の作成という一連の流れのもとで行われている。また、授業充実を図るための組織体制づくりや研修、学年や教科間の連絡調整等も、この流れのなかに含めて考えることができる。



当センターの調査で使用した「教育課題把握シート」の質問項目は、こうした授業実践に関わる一連の流れに関する内容であり、個々の教師に対する調査結果から、組織として解決を目指すべき教育課題を導き出すことができる。教育目標から授業実践までの流れのなかで、課題解決に向けた組織としての活動は、授業実践という個々の教師の活動につながっていくという関係にある。教育課題の解決という目的的な取り組みにおいて「個々の教師の活動」と「各組織単位や学校全体で取り組む活動」をすりあわせていくことで、学校組織を活性化していくことが学校組織マネジメントの重要な視点である。

本研究では、研究協力校における「教育課題把握シート」の集計及び分析結果をもとに、「授業実践上の課題の明確化・共有化」→「課題解決のための実行策の検討」→「実行策の実施・評価」といったプロセスで組織的に取り組むこととした。そして、学校組織マネジメントの考え方や手だてを参考にしつつ、「教育課題把握シート」の実施をとおして明らかとなった授業実践上の課題に対する組織としての協働的な取り組みの在り方を実践的に検証し、その成果を本県の特別支援教育の改善・充実に役立てていきたい。

II 研究の計画

「授業充実に向けた協働的な取り組みに関する研究」

－ 学校組織マネジメントの視点から －

第一年次 組織としての授業実践上の課題の明確化・共有化の仕方と課題解決のための実践

第二年次 授業充実のための協働的な取り組みの中核である授業研究の在り方

III 研究の経過(一年次)

1 研究協力校における取り組み

(1) 「教育課題把握シート」による調査の分析と授業実践上の課題の明確化・共有化

「教育課題把握シート」はⅠ目的的要因、Ⅱ組織的要因、Ⅲ人間的要因、Ⅳ組織風土的要因の4つの要因で構成されている。研究協力校の調査結果をその4つの要因間で比較してみると、人間的要因、組織風土的要因の評価点平均は高く、逆に目的的要因は低くなっていた。各要因の要旨(質問内容)で見ていくと、人間的要因の中の「協働的な関係」「同僚関係」が高く、目的的要因の中の「力量の自己評価」「実践と自己評価」、組織的要因の中の「構想や準備」「反省と改善」とは、大きな開きがある現状であった。この結果をもとに「なぜ評価点が高いのか」「なぜ評価点が高いのか」という、表れた数値の背景を一人一人が付箋に書き出し、それを下(表1)のように整理していくことで共通理解を図った。

[表1]

良好なコミュニケーション 人間関係	教育に対する意識・向上心	会議・校務分掌	その他
話し合いながら一緒にやっという雰囲気、人間関係があり、共に働くことへの安心感、楽しさがつくられやすい。	実践と自己評価は低く出ているが、これは、もっともっとという教員の向上心の表れであるように思った。弱みでもありつつ、でもよいところのようにも感じた。	子どもの実態に応じてよりよい授業を行うために教材の準備を行うには、放課後の時間では足りないことが原因と思う。授業準備の他に学級事務や校務分掌の仕事が加われば、なおさらである。	学部間で対立があるとは言えないが、連携もしているとは思えない。お互いのことに関心がなかったりすることも多く、一つの行事を行うにしても一体感を感じる場面が少ないのではないかと。
同僚関係の善し悪しは授業に反映される。よって、この項目が高いことは注目すべきである。協調性があり、意見のとびかう職場でありたい。	子どもにとって必要な大切な授業を行っているか、反省しながら行うようにしている。	効果的な会議の持ち方、効率がよい話し合いの進め方、意見の出し方ができていない。	組織的要因の点数がやや低い。組織の在り方、流れはどうあればよいのか。
学部内の人間関係が比較的良好であるため、協力(働)体制をつくりやすい。	人間関係と評価	目標と自己評価	PDCAの流れについて評価・改善が低い。具体的にはどうすればよりよくなるのか。一番私たちが実践しやすいところなのかなと思う。
	和やかな雰囲気の間人間関係があるため、ともすると、なれ合い・妥協に陥ってしまう可能性がある。	子どもの成長が簡単に見えるものではないため、自分のかかわりがこれでいいのかという不安は大きくある。組織として研修会の機会に様々な先生方の助言を頂き、自己評価することは、組織としての良さでもあると思う。	
	実践はしつつも反省・改善の面で、ややあいまいに評価しているような感じがした。	目標のとらえが甘いのか、また、達成のためにどう実行したらよいか、とまどいを感じたり、自信を持てなかったりしている	



その結果、組織の強みとしては、「良好なコミュニケーションや人間関係」「教育に対する意識・向上心」が挙げられた。一方で、組織の弱みとしては、「目標と自己評価」が挙げられた。また、評価点の高かった人間的要因については、その和やかな関係が反対の方向に作用する可能性も指摘されている(「人間関係と評価」)。評価点の高低にかかわらず、その背景を具体的な場面に探っていることがうかがわれる。一人一人の考えを組織全体で理解することは、協働的な取り組みを進めていく上で大変重要



なことであり、学部の教育課題をより明確にしていくための資料となった。

(2) 教育課題の設定と実行策の検討

① 教育課題の設定

「感想の整理」[表1]等をもとに、教育課題（授業実践上の課題）の設定に取り組んだ。検討にあたっては、研修グループ（5～7人程度）ごとに3つに分かれたあと、まず、**それぞれ自分の考えを付箋に書き出し、その後グループ内で協議し、最後に各グループから出された意見のすりあわせ**を行い、石川養護学校小学部の教育課題を、**授業の具体的な目標の設定と評価の改善**と設定した。

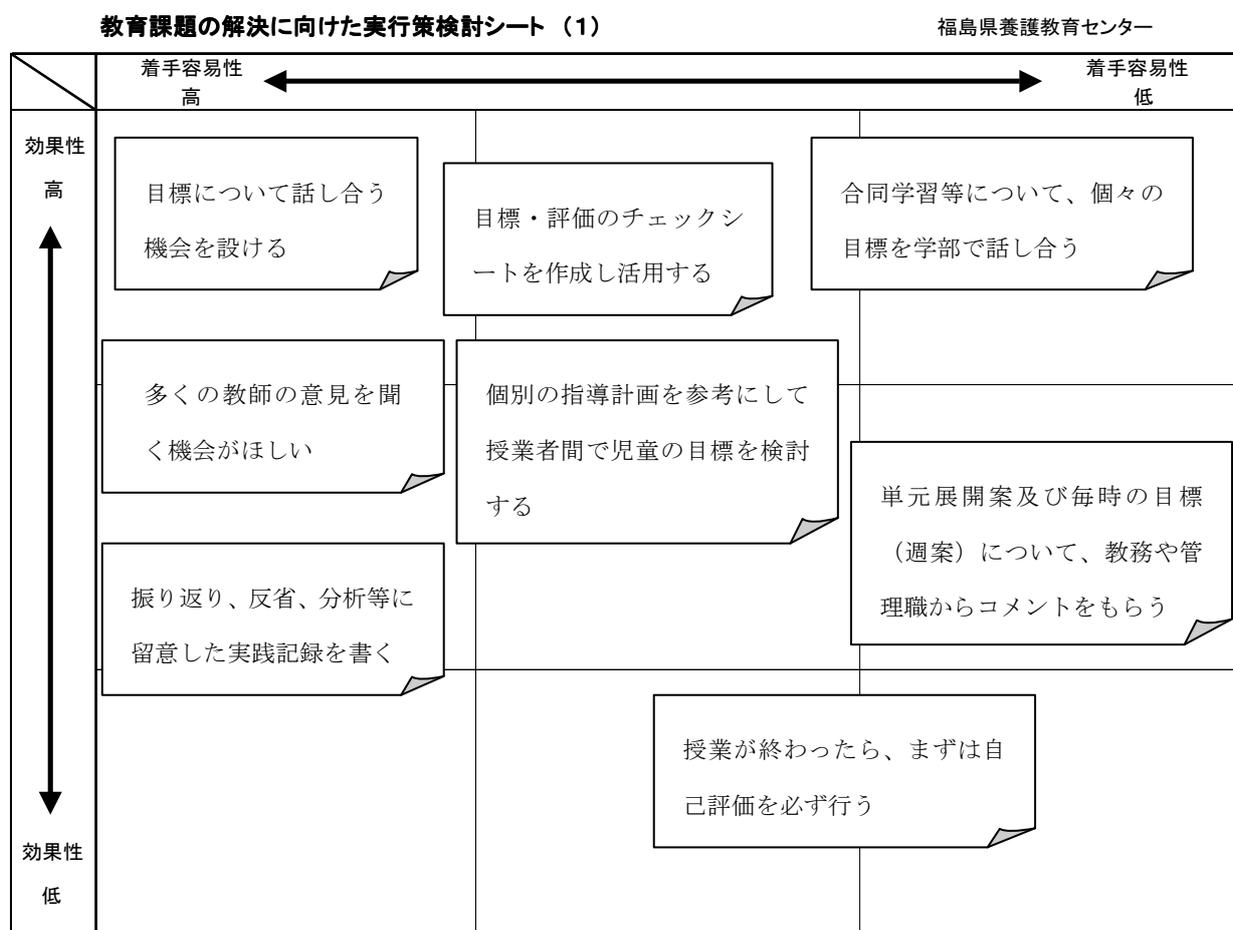
② 課題解決のための実行策の検討

授業の具体的な目標の設定と評価の改善に対する実行策の検討は、課題設定時と同様に、まず個々の教師が自分の考える現実的に実施できそうな実行策を自由に付箋に書き出していった。

- ① 組織の強みをもっと活用した授業充実のための取り組みは？
- ② 組織の弱みを克服するためには、どのような取り組みが必要か？

全員が実行策を付箋に書き出したあと、着手のしやすさ（容易性）や期待される効果（効果性）の度合いなどをグループ内で話し合いながら、「実行策検討シート（1）」に位置付けた。

【実行策検討シート（1）作成例】



(3) 実践と検証

① 実践と授業研究会

研修部が中心となって「授業評価シート」を作成した。**授業の具体的な目標の設定と評価の改善**に向けて、特に授業のねらい、本時の目標がかなり具体的になり、評価しやすくなった。このシート及び学習指導案略案と、授業のVTRを見ながら授業の検討を行った。たくさんの意見や感想が出され、そのときどきの児童の思いを推察した上で、ことばかけや教材・教具の工夫等の指導方法や、子どもの行動の読み取りについて活発に協議が進んだ。反面、「なぜ、この目標なのか」というような、目標の吟味に関する意見はほとんど出ず、指導方法についての話し合いに終始した感があった。

② 実行策の検証

実行策の一つである「授業評価シート」の活用等についてアンケート調査を行い、その有効性を検証した。その結果を踏まえた成果と課題は以下のとおりである。

○ 成果

授業検討会については「授業の修正に役立った」という意見が多く、「授業の修正」に役立ったということは、次時の授業の計画につなげることができたと言えよう。

また、授業評価シートについては「授業の評価に役立った」という意見が多く、ついで「授業の修正」となっている。授業者は、授業の目標、目指す具体的な児童の活動の様子を書き込むことにより、授業全体を焦点化することができ、授業者以外の教師にとっては、ねらいや活動の内容、支援の方法などが適切であったかどうかについて、視点をより具体化させてみることができ、なおかつ、その検討をとおして自分の授業の見直しをすることができていると考えられる。

◎ 課題

自身の研修の在り方と同じぐらい「他者からの客観的な評価」が重要であるとの意見が多かった。「他者の意見」を重要視しているということは、授業充実のためには、組織としての協働的な取り組みが必要であるとの認識があると言い替えることができる。

しかし、教育課題として設定した「授業の具体的な目標設定と評価の改善」という視点からは、授業研究会では「評価」に重点が置かれたこともあり、「具体的な目標の設定」という部分について焦点化した協議を行うことが難しい状況であった。「具体的な目標の設定」という課題の解決のためには、授業を構想する時点での目標の設定に組織として取り組む必要があり、それは「評価の改善」という視点からも重要であると考えられる。

2 第1年次の研究のまとめ

(1) 学校組織マネジメントの視点

調査結果から読み取れる傾向は、個々の教師が抱える授業実践上の課題を反映するものであり、教育課題を明確化・共有化するということは、そうした課題の解決に向けて組織の力を発揮、焦点化しようとする取り組みである。研究協力校においては、個々の教師がまず自分の考えを付箋に書き出し、グループで検討する手続きをとることで、すべての教師がそのプロセスに関わることができた。個々の教師の課題から組織として解決すべき課題を焦点化し、また、その課題の解決に向けた取り組みも個人から組織へとつなげていくという学校組織マネジメントの視点は、課題解決に向かう個々の教師の積極的な参画を促し、学校組織を活性化していくうえでも重要といえる。

(2) 課題解決のための授業研究の在り方

研究協力校においては、教育課題を「授業の具体的な目標設定と評価の改善」と設定した。これは、授業研究会においては実践場面を中心に検討することだけでは不十分であり、むしろ実践をする前の検討（指導目標や内容、あるいは指導方法等について）の段階に、組織の力を発揮していこうとする取り組みが必要である。

「特別支援学校における教育課題に関する調査」から自校の授業実践上の課題を明確化・共有化し、その解決に向け、組織として取り組んだ一年次の研究からは、授業充実のための協働的な取り組みの中核である授業研究の在り方自体を見直す必要性がうかがえる。

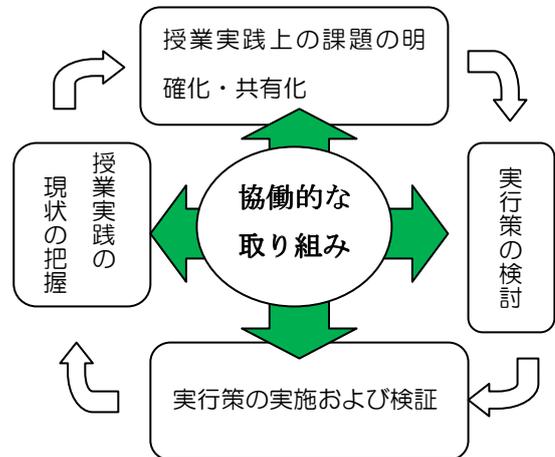
IV 今年度の研究(二年次)

1 研究の内容

授業充実に向けた一連の協働的な取り組みの在り方

特に、個々の取り組みでは解決が難しい授業実践上の課題に対し、その課題の解決、または改善に向けた協働的な取り組みの在り方

昨年度の研究の課題「授業充実のための協働的な取り組みの中核である授業研究の在り方自体を見直す」をふまえ、今年度は特に授業研究の在り方に重点を置いた学部全体での取り組みを行っていく。研究協力校は、石川養護学校中学部である。

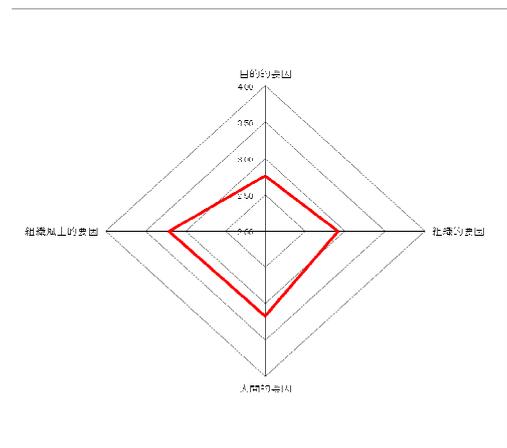


2 研究の実践

(1) 「教育課題把握シート」による課題の明確化、共有化

教育課題把握シートによる調査結果「目的的要因」と「組織的要因」が、どちらも他の2つの要因よりも低くなっているダイアグラムである。

この調査によって表された数値の意味するところを、昨年の方法を用いて全員で協議し、中学部の授業実践の現状を共有し、課題を明確にしていった。



(2) 学部研究主題の設定

研究協力校である石川養護学校中学部では、平成 19 年度までの学校研究、学部研究における成果と課題を踏まえ、次頁のような研究主題を設定した。なお、平成 18 年度から 2 年間個別の指導場面を中心に研究を行い一定の成果を得ることができたことから、今年度は集団で行う授業場面を取り上げている。

《石川養護学校中学部》平成19年度までの研究の成果と課題

- 「生徒たちが安心して取り組む場面の設定」「生徒の実態に応じた手段の工夫」
 - 「授業に対する生徒の意欲の高まり」
 - 「ことばに対する興味が増え、進んで使おうとする態度の向上」
- 「重複・通常グループ別に分かれた研究」
 - 「意見が出やすい少人数の状況」
 - 「担当一人では気づかない点への意見」
- ◎ より多様な環境への適応のための「ことばの力、対人関係の広がり、主体性」を身につけることができる支援
- ◎ 「研修計画の日程」「話し合いの持ち方」「論点の絞り方」の工夫
- ◎ 学部全体で行っているという実感

今年度の改善・努力事項

「ケース会議や担当者間の話し合いを充実させながら、個別の指導計画に基づく合同学習における生徒の目標や手立てを検討・確認し、授業実践に生かす」

研究主題

組織を生かした授業づくりはどうあればよいか

合同学習における生徒の目標設定と手立ての検討

- ・ 学部全体で研究を行う（自立活動・音楽）
- ・ 知って！知って♡カード
- ・ 授業組み立てシート
- ・ 担当グループ→全体協議（目標と手立ての検討）→研究授業
→（担当グループ）→全体協議
- ・ 学部員全員が意見を表明する

授業研究会の在り方

養護教育センタープロジェクト研究の課題
「授業充実のための協働的な取り組みの中核である授業研究の在り方の見直し」

【プロジェクト研究の視点】

目的的要因の中で自分に対する、または自分の実践に対する評価が高くない。しかし、同僚の一人一人の力量については、高い評価がある。つまり、一人一人は高い力量があっても、必ずしもそれぞれの力を向上させるような組織ではないのかもしれない。もし、そうだとすれば、部分部分をそれぞれが分担して教育活動を行うだけでなく、その一人一人の高い力量を一人の生徒に、一つの授業に結集するという組織的な取り組みが必要なのではないか。そしてそれは、人間関係の良さや、組織の雰囲気の良いなどを生かし、「知って！知って♡カード」や「授業組み立てシート」を活用して行くことで、一人一人の高い力量がそれぞれに影響し合い、それぞれの力量アップにも、自己肯定感のアップにもつながっていくのではないか。それは言うまでもなく組織の活性化であり、重度重複化が進み、多様な教育的ニーズのある中学部の生徒たちへの教育に対応できる組織となりうることである。

(3) 組織を生かした授業づくりのツール（協力校考案）

『知って！知って♡カード』

知って！知って♡カード					
No.	年 組	生徒氏名	D	記入者	〇〇
【得意なこと】 文字を丁寧に書くこと。よく気が利くこと。体を動かすこと。・・・					
【苦手なこと】 リズム打ちやスキップ。気持ちを伝えること。初めての環境・場面・人・・・					
【アドバイスください】 〇〇さんのことで何か気づいたことがありましたら、どんな場面でも結構ですので教えてください。担任のみの見方だとどうしても偏った見方をしてしまいますので・・・					

※ 学部の教師全員が生徒一人一人についてその特徴を理解するためのもの。担任は、このカードに書き込むことで、その時点での生徒の理解を整理することができる。担任外の教師はその生徒のおおよそを理解することができ、担任がどのようなことで悩んでいるのかも知ることができ、情報の交換が活発に行われることが期待される。また、得意なことや苦手なことについて加除することもでき、学年間の引き継ぎや学部間の引き継ぎの際の貴重な資料となる。

『授業組み立てシート』

活動内容	生徒のねらい	必要となる手立て
1 活動の準備 ・活動場所への移動	生徒A：準備物を持つことで次の活動が分かり移動することができる。 生徒B：教師とのコミュニケーションの中で活動場所と内容が理解できる。	●好きな活動のローラーと台車を提示し活動の予告をする。 ●身振りサインや写真カードを使って活動の予告をする。

※ 個人で、そして学部全体で授業をつくっていくための資料となるものである。日々行っている授業をこのシートに項目に添ってまとめ、その授業のVTRとともに学部研修の場に提示する。学部の教師一人一人が、その生徒のねらいやねらいを達成するための学習内容と手立てについてアイデアを出し、それをまとめ、次時の授業に生かすことをねらいとしている。

『意見表明シート』

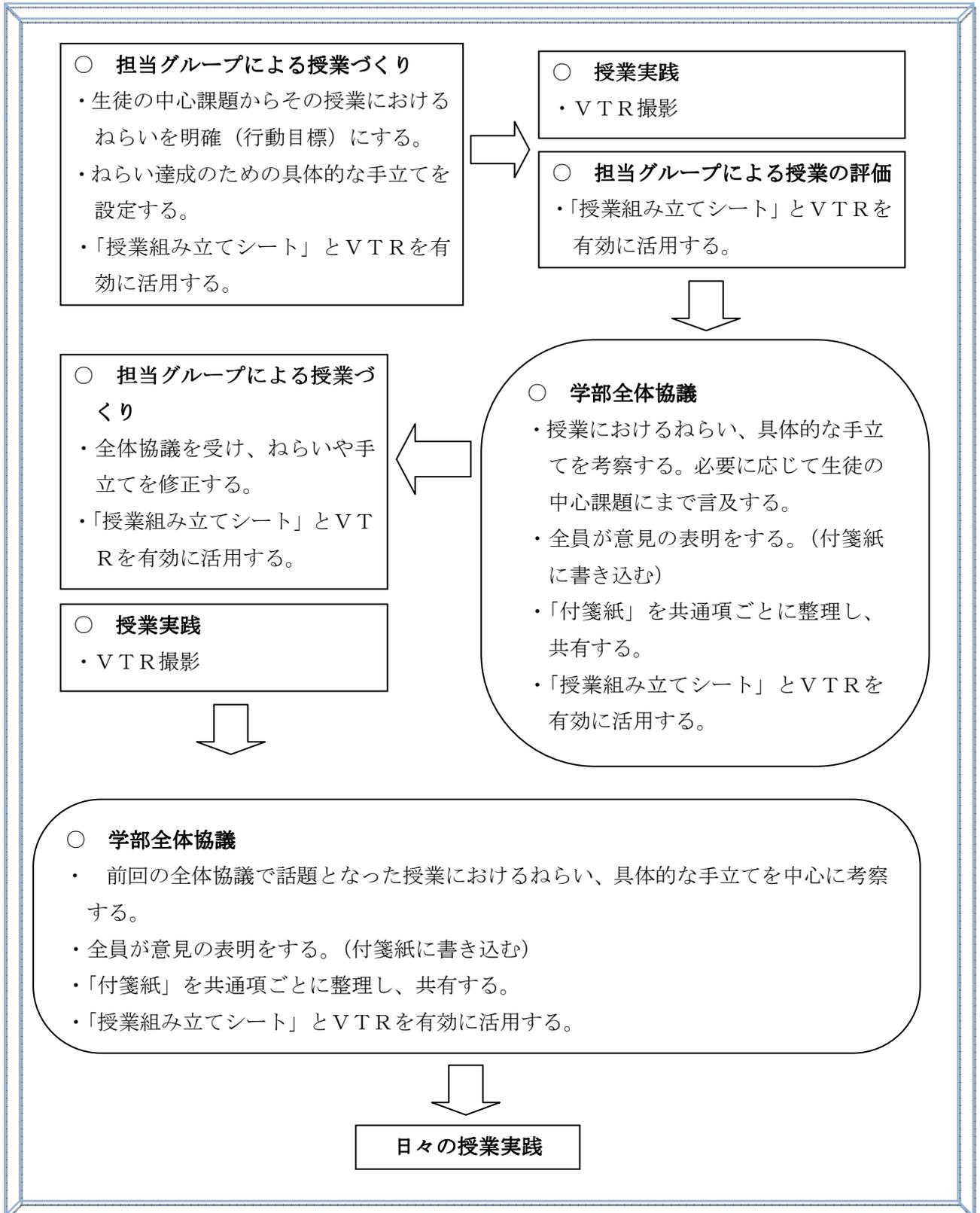
※ これは、一般的な付箋紙を使用した。この付箋紙に学部研修の場に提示された授業における生徒のねらいや学習内容等について自分の考えを書き込む。書き表すことで自分の考えがより明確になるとともに、それを協議の場で効果的に使うことによって協議の流れや結末を視覚的に捉えることができ、出された意見をそのまま保存することもできる。

また、挙手形式と違い教師一人一人が自分の考えを表明することから、一人の生徒、一つの授業のねらいや学習内容等の妥当性、手立てのヴァリエーションが広がり、授業者の授業構築に役立つ。さらに、教師一人一人の授業における生徒のねらいや学習内容等に関する考え方についての力量アップが期待できる。

(4) 実践

① 授業研究の流れ

研究協力校においては、自立活動と音楽の授業を研究の題材として実践に取り組んだ。授業の実施は2つのグループに分かれるが、それぞれの授業づくりを学部全体で考えていく下記のような流れで実践をすすめた。



② 授業研究の実践

協力校における実際の授業研究を一部紹介する。ここでは、前頁のような授業研究の流れが定着してきた2学期中頃の音楽の授業研究を取り上げる。

《授業組み立てシートの一部》

i 担当グループによる授業づくり

授業におけるねらいや具体的な手立てを考察していく際の対象生徒を数名決め、右図のように授業組み立てシートを活用して授業の流れに沿ってその生徒のねらいと手立てを書き出していった。

学習内容・活動	生徒のねらい (Y)	必要となる手立て
・授業の準備をする (昼休みの活動)	役割への意識を高めたり、今日の活動に対する見通しを保持したりすることができる。	・CDのセッティングを一緒に行うことで授業で使うCDや曲順などを確認できるようにする。

ii 授業実践と授業の評価 (担当グループ)

授業組み立てシートを活用して授業を行い、授業をVTRにおさめた。

VTRを活用し、担当グループ内でねらいや手立ての評価を行った。

全体協議で検討してもらった事項を具体化し、絞り込んだ。 《VTRを活用した授業検討の様子》

iii 学部全体協議

授業のVTRと授業組み立てシートをもとに、生徒のねらいと具体的な手立てについて考察した。

担当グループで絞り込んだ検討事項に関する場面を中心にVTRを流し、授業組み立てシートを活用して、対象生徒のねらいと実行した具体的な手立て、そしてその結果について説明を行った。



《付箋紙に書かれた意見の整理の様子》

授業全般に関する質疑を行った後、小グループに分かれ、対象生徒のねらいと具体的な手立てについてまず一人一人が付箋紙に自分の考えを書き込み、発表していった。そのあと、各グループごとに出された意見を整理していった。



iv 授業づくりと授業実践 (担当グループ)

全体協議を受け、担当グループでは修正したまたは付け加えたねらいや手立てを設定し、授業を行いそれもまたVTRにおさめた。

v 学部全体協議

前回の全体協議で話題となった授業におけるねらい、具体的な手立てを中心に考察した。協議の流れはiiiとほぼ同じである。

《修正を加えた授業組み立てシートの一部》

生徒のねらい	行った支援 (新たに付け加えた支援)	結果
・役割への意識を高めたり、今日の活動に対する見通しをもったりすることができる。	・本人の同意を得て昼休みのうちに教師と一緒にCDデッキの準備を行う場面を設定する。 ・CD係の場所を、離席しても戻ってきやすいように入出口の近くに、長机や椅子を置いて明確にする。	・ドラムコードの準備を中心に積極的に行った。

③ 授業研究の考察

授業充実に向けた協働的な取り組みの中核である授業研究の在り方に視点を置いてプロジェクト研究を行ってきた。その有効性について、協力校の教師の実感と生徒の変容から考察をする。

i 教師の実感

今年度これまで行ってきた授業研究について、次のようなアンケートを実施した。

今年度これまで行ってきた授業研究会について

◎「全員で一つの授業をつくっている」という実感はありますか？

ある。(11) 少しある。(6) ない。(0)

「ある」と答えた理由としては、

- 話し合いにより洗い出された問題点や課題への対策を確実に実行し、成果を上げることができた。
- 何度も話し合いの場を持ち、実態についての情報交換や手立てについての話し合い等を行い、授業に生かすことができた。
- 一人一人の教師方から様々な意見を出していただいたり、生徒の見方について多様な実態を知らせていただいたりしながら授業を組み立てることができた。

等、「授業研究会の運営がうまくいっている」と感じている意見が多かった。その授業を担当しているしていないにかかわらず、教師一人一人が自分の考えを表明し、それらを練り上げながらその授業の組み立てを支えていくということができてきていると思われる。また、次のような意見もあった

- 放課後、「この子はこれが好きそうだ」「のってくれるかなー」などと話しながら教材をつくるのは楽しかった。
- 話し合う場があり、それぞれの教師方の考えを聞きながら同じ方向にまとまっていくことを感じたため。
- TT間の話し合いも増えてきたように思う。

これらは、授業研究が、学部自体の雰囲気向上、教師の意欲の喚起、よりよい協働体制の構築に波及した可能性が示唆される。

◎「自分の授業実践は学部の教師方の考えに支えられている」という実感はありますか？

ある。(12) 少しある。(4) ない。(1)

「ある」と答えた理由としては、次のようなものが多かった。

- 支援についての共通理解が図られたので、自信をもって支援にあたることができた。
- 子どもたちの変容から、担任一人では現在のような変容は見られなかったと思う。
- 生徒一人の一つの行動についても様々な見方があり、他の教師の意見が参考になり、見方や手立てを自分の授業にも取り入れ生徒の好反応を得た。

一年次の研究のまとめにおいて、自分の授業が子どもの役に立っていると実感するためには、「他者からの評価」を重要視していることは述べた。まさに、この授業研究を行っていく過程で、教師の自己評価に影響を与えているものと思われる。

◎「担当している生徒の行動の見方、授業の目標や手立てを考えるヒント」を得ることができましたか？ できた。(17) できない。(0)

「できた」理由としては次のようなものがあげられた。

- 改めて自分の担当する生徒の行動を見直すきっかけとなり、そこからかわり方を変えることができた。

- 自分一人の見方だけよりも多くの教師からの多様な意見をもらうことで、見方や考え方が広がり、いつもと違った角度で授業を見直すことができた。
- 自分の考えだと偏りがあるが、プロジェクト研究でいろいろな意見を聞くといろいろな角度から接してみようという意欲が出てくる。
- 自分と同意見や違う意見を聞くことでさらに自分で考えることができたように思う。

これらは、この授業研究を通して教師一人一人がもつ様々な考えを知ることで授業の目標や手立てを考えるヒントを得たということにとどまらず、「かかわり方を変えることができた」「見方や考え方が広がった」「意欲が出てくる」「自分で考えることができた」など、自分の実践もしくは自分自身の変容について述べられていると考えることができる。

ii 生徒の変容

授業研究の対象として取り上げた生徒の具体的な変容については、たとえば自立活動の授業研究の際の対象生徒Aについては次のような意見が各教師から出された。

【当初の様子】

- ・自己否定感や不安感が強いためか、暴言が多く見られたり、授業に参加しないことがあったりする。

【変容】

- ・事前でもとても拒否することがあるが、一度見に行くことで、入ることができるときもあった。
- ・「やろう！」ではなく、「見学しよう!」、「迎えにいこう!」などの誘いで入れたこともあった。
- ・「にじいろ～」の活動（自立活動）の中で、Aくんが少し余裕ができてきて、他生徒にも目が向けられるようになってきているように思う。
- ・保健の教師がカードをもってくるとき、嫌がっていたが、「Aくん、受け取ってね。」や「ありがとう。」のやりとりを続けることで、暴言なく受け取ることができるようになってきた。
- ・回を重ねるうちに徐々にねらいに近づいてきているように思う。
- ・音楽室に対する不安感は少し減ったようだ。時々、「音楽の授業に出てみる。」と言って参加することもある。1回目は拒否しても、2回目、3回目と参加できることが多い
- ・回を重ねるごとに自分から参加できるようになってきているし、友達とのかかわりを好んでいるようにも感じる。

以上のように、少しずつではあるが、生徒の変容が見て取れる。

3 まとめ

昨年度の成果と課題を踏まえ、今年度は、「授業充実に向けた一連の協働的な取り組みの在り方」を研究の内容とし、その協働的な取り組みの中核である授業研究の在り方について石川養護学校中学部の協力を得て研究を進めてきた。

授業研究会についてのアンケートにもあったが、教師が授業の充実につながっていると自覚ができる授業研究会の在り方を追究することができた。今年度行ってきた授業研究会について協力校で話し合った結果、成果と課題は次のことがあげられた。

(1) 研究の成果

① 様々な角度からの意見がたくさん表明されること

様々な意見の中に、授業はもちろん生徒とのかかわりの手がかりがあり、ねらいや手立てを検討していく上で大変役に立ったという意見が多かった。多くの意見が出されても、協議をしていく上での視点が定まっていなければ、授業を充実させるために有効な話し合いであるとは言えない。やはりここでは、「授業組み立てシート」を活用した支援の整理と協議する視点をあらかじめ絞り込んだ授業研究会の運営が大きく影響しているのではないかと考える。



② 対象生徒以外にも波及する手立ての発見

対象生徒のねらいや具体的な手立てを考え、実践していく中で、その授業全体がよくなってきたという意見が多く出された。これは、一つにはその具体的な手立て自体が他の生徒にも通用したということが考えられる。そして、もう一つには、話し合いを行っていく過程で教師一人一人が対象生徒以外の生徒のねらいを改めて意識し、具体的な手立てを考え実践していたのではないかとすることも考えられる。これは、授業の充実のためになくしてはならない視点である。



③ 自分の授業に自信をもつことができること

学部全体で生徒の実態、ねらい、具体的な手立てを考えていくことで、まず授業者が自信をもって授業を行うことができたこと。また、それぞれの教師がそれぞれ主に担当している生徒に対する支援の考え方や内容、方法がより生徒に即したものとなり生徒の学習行動に変容が見られ、結果として自分の自信につながったことがあげられる。



(2) さらに充実した授業を行うため組織として取り組むべき内容

① 授業研究を繰り返し行うこと

今年度、音楽と自立活動を授業研究の場面として取り上げ、校内研修計画に沿って研究を進めてきた。これを、研修日に限らず、音楽、自立活動に限らずに全ての授業場面において授業の構想から評価、そして修正、評価と授業研究を継続していかなければならない。そのためには、生徒の実態について今以上に共通に理解をしておく必要があり、「知って！知って♡カード」をより有効に活用していくことを考えなくてはならないという意見が多く出された。

② 組織作り

一人一人が中学部の授業の改善を考え、授業充実のために活発に議論することができ、お互いに影響し合える組織作りを継続して進めていかなければならないとの意見も多かった。そのためには、今年度行ってきた授業研究のように、全ての授業、全ての生徒への指導を教師一人一人が自分のこととして捉え、自分の考えを伝え合うという場を設定していかなければならない。

V 研究のまとめ

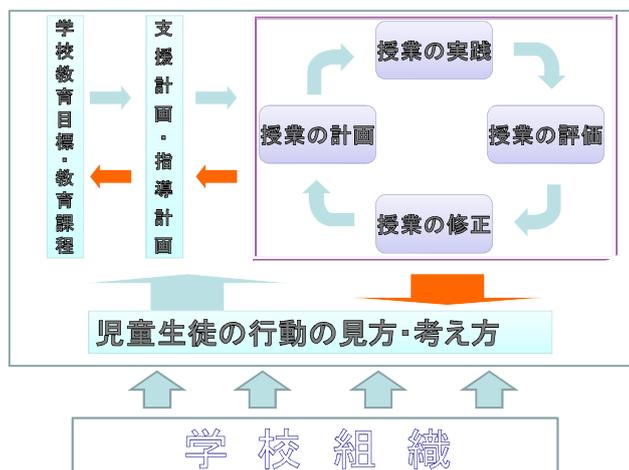
1 課題解決のための授業研究の在り方

昨年度から2年間にわたって、学校組織マネジメントの視点を生かした授業充実のための協働的な取り組みに関する研究を行ってきた。

牧昌美氏らの研究をもとに「教育課題把握シート」を作成し、各校における教育課題を調査し、その解決に組織的に取り組む実践を石川養護学校小学部、中学部の協力を得て展開してきたところである。

「教育課題把握シート」の中で「実践している授業や自分の力量の評価」についての評価点が低くなっていることに着目し、一人一人の教師がそれぞれに教育実践を展開している現状において抱える課題は、組織としての課題であると考えた。そして、個々の教師が抱える授業実践上の課題の解決に組織の力を発揮しようとする、つまり、授業充実のための協働的な取り組みの中核である授業研究の在り方自体を見直してきたのである。特に今年度は、昨年度の研究において課題と捉えた、指導目標や内容、あるいは指導方法等の検討に組織の力を発揮していこうとする取り組みが必要ではないかということを受けて行ってきた。

その結果、協力校における教師の実感や生徒の変容から、一人一人の教師のPDCAサイクルを支える学部組織としての取り組みを追究することができたと考える。本研究で取り組んできた授業研究は、その組織に応じて使いやすいツールを作成し、協議の視点を絞り込んで教師一人一人が自分の考えを表明し、それを整理していくという、少しの工夫で組織の力を個々の実践に生かすことができる授業研究である。協力校における研究のまとめにもあるとおり、まだまだ完成されたものではない。今後、この授業研究の仕方や、協議の手法等をさらに自校化し、組織力を生かした授業充実のための協働的な取り組みの実践を進めていってほしい。



2 常に組織の活性化を図る

マネジメントというと、管理職等がするものと受けとめがちである。しかし、本研究では、中学部の教師一人一人が「組織を生かした授業づくり」に取り組み、授業充実に向けた組織の在り方を考えた実践である。すなわち、授業を充実させるためには、教師一人一人が、中学部という組織がどうあればよいかを考え、自分たちが向かうべき方向を見定め、見つけ、協働的な取り組みを積み重ねていったものである。

2年間、授業研究会という協働的な取り組みをとおして組織の活性化を図り、授業の充実について考えてきた。授業充実に向けた組織の活性化は、何か一つの方法を実施すれば達成されるというものではない。また、一つの課題を解決すればそれで終わりでもない。そのときどきの教育課題を共有し、教師一人一人がその課題解決のために何をすればよいかを考え、教師が一丸となってその課題解決に向けて行動を起こし、常に授業の充実に向けた協働的な取り組みをしていくことが重要であると考えられる。